

Title	前期授業概要
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 15 P.2-P.2
Issue Date	2006-03-10
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/11997">http://hdl.handle.net/11094/11997</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 前期授業概要

1	2	3	4	5
<p>4月16日</p> <p>紀平 直樹 武田 朋士 濱田 唯</p> <p>オリエンテーション</p> <p>研究室紹介、コーディネーターの自己紹介、今年度の授業計画の説明、アンケートを行いました。</p> <p>〈アンケート項目〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ「哲学」を選択しましたか</li> <li>・「哲学」という言葉で何をイメージしましたか</li> <li>・最近興味をもっていること</li> <li>・『メチエ』に感想やコメントを書いてみましたか</li> <li>・好きなお笑い芸人は？（後期・武田の授業の準備のため）</li> </ul>	<p>4月23日</p> <p>西村 高宏 コーディネーター 武田 朋士</p> <p>生命1-「ひとはいつ人になるのか」</p> <p>哲学とは、問いを立てる学問であり、情報を適切に処理するためには適切な問いを立てることが必要である。病床前診断、出生前診断による選択的中絶について情報提供し、それをもとに問いを立てる訓練をするというのが、今回の授業の目的であった。</p> <p>「意志を持たない人にどう対処していくか?」、「受精卵の潜在性を痛む権利はあるのか?」、「生命は流動的なものであり、ヒトはいつ人になるのか?という形で、段階的に人であるかどうかを問うのはおかしいのではないか?」などの問いが、講師と生徒とのやりとりも交えながら出された。人数、時間の都合上、一人ひとりの問いが検討されたわけではないが、十分哲学的な問いは出された。</p>	<p>5月7日</p> <p>寺田 俊郎 コーディネーター 榎本 直樹</p> <p>生命2-「死ぬ権利はあるか」</p> <p>安楽死の法的分類、尊厳死をめぐるQOL(生命の質)とSOL(生命の神聖さ)の対立状況などを紹介したのち、患者の自己決定権、とりわけ「死ぬ権利」という点について、生徒の質問を受け付けるという形で議論を行う。</p> <p>授業後半では、死ぬ権利と社会・共同体・他の人々との関係に絞って、生徒達だけで議論させ「問い」の形にしてみたい、その問いを中心に議論をすることを試みた。</p> <p>議論は活発に行われさまざまな意見は出された。しかし生徒が「問い」の形にする段階に苦労し、さらに議論の抽象度をあげることができなかつた。その際の教師側の工夫が課題として残った。</p>	<p>5月14日</p> <p>高橋 綾 コーディネーター 紀平 直樹</p> <p>環境1-「人間と動物の違いはなにか」</p> <p>前回までの授業スタイル(情報提供とディスカッション)とすこし趣向を変え、環境に関するテーマで「ソクラテスの対話ゲーム」を行った。</p> <p>生徒達には3人1組でソクラテス役(質問役)、若者役(答える役)、プラトン役(記録役)に分かれてもらい、問いに関する答えを選択、それぞれ役割になりきってもらい「なぜそうなのか?」について問答してもらおうというものでした。大半の生徒が積極的に、楽しんでゲームに参加していた。</p>	<p>6月11日</p> <p>紀平 直樹 コーディネーター 濱田 唯</p> <p>環境2-「人間にとって文化とはなにか」</p> <p>映画10ミニッツ・オールドーのなかの「失われた一万年」を最初に鑑賞し、その後、「人間にとっての環境の意味」というテーマで話し合いをしてもらった。</p> <p>テーマが抽象的だったことにも起因しているのか、対話の途中からテーマがずれて行ってしまい、対話に参加できずにいた生徒もいた。</p>